

石橋

結崎十郎作

前

ワキ

シテ

寂昭法師

樵童

シテ

後

シテ

獅子

「是は大江の定基といはれし寂昭法師にて候。我入唐渡天し。初めて彼方此方を拝み廻り。唯今青涼山に参り候。是に見えたるが石橋にて有りげに候。暫く人を待ち委しく尋ね。此橋を渡らばやと存じ候。」

シテ一聲
「松風の。花を薪に吹き添へて。雪をも運ぶ山路かな。

シテサシ
「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の声。人間万事さまざま

の。世を渡り行く身の有様。物毎に遮る眼の前。
光りの陰をや送るらん。

下歌
「余りに山を遠く来て。雲又跡を立ち隔て。

上歌
「入りつる方も白波の。く。谷の川音雨とのみ。
聞えて松の風もなし。實にや誤つて半日の客たり
しも。今身の上に知られたり。く。

ワキ詞
「如何に是なる山人に尋ぬべき事の候。

シテ詞
「何事を御尋ね候ふぞ。」

ワキ 「是なるは承り及びたる石橋にて候ふか。

シテ 「さん候是こそ石橋にて候。向ひは文珠の淨土青涼

山。よくく御拝み候へ。

ワキ 「さては石橋にて候ひけるぞや。さあらば身命の仏

力にまかせて。此橋を渡らばやと思ひ候。

シテ 「暫く候。其上名を得給ひし高僧達も。難行苦行

捨身の行にて。こゝにて月日を送り給ひてこそ。

橋をば渡り給ひしに。獅子は小虫を食はんとても。

先勢をなすとこそ聞け。我法力のあればとて。行く事かたき石の橋を。たやすく思ひ渡らんとや。あら危しの御事や。

ワキ 「謂を聞けば有難や。たゞ世の常の行人は。左右なう渡らぬ橋よなふ。

シテ 「御覧候へ此滝波の。雲より落ちて数千丈。滝壺までは霧深うして。身の毛もよだつ谷深み。

ワキ 「巖峨々たる岩石に。

シテ
「わづかにかかる石の橋。」

ワキ
「苔は滑りて足もたまらず。」

シテ
「渡れば目もくれ。」

ワキ
「心もはや。」

地
「うはの空なる石の橋。く。まづ御覧ぜよ橋もと
に。歩み望めば此橋の。面は尺にも足らずして。
下は泥梨も白波の。虚空を渡る如くなり。危しや
目もくれ心も。消えくとなりにけり。おぼろけ

の行人は。思ひもよらぬ御事。

ワキ詞
「なほく 橋のいはれ委しく御物語り候へ。」

地クリ
「夫れ天地開闢の此方。雨露を降して国土を渡る。
是れすなはち天の浮橋ともいへり。」

シテサシ
「其外国土世界に於て。橋の名所さまぐにして。」

地
「水波の難をのがれ。万民富める世を渡るも。すな
はち橋の徳とかや。」

クセ
「然るに此石橋と申すは。人間の渡せる橋にあらず。」

おのれと出現して。つゞける石の橋なれば。石橋と名を名づけたり。其面わづかに。尺よりは狭うして。苔甚だ滑かなり。其長さ三丈余。谷のそくばく深き事。千丈余に及べり。上には滝の糸。雲より懸けて。下は泥梨も白波の。音は嵐にひき合ひて。山河震動し。雨塊を動かせり。橋のけしきを見渡せば。雲にそびゆる粧ひの。たとへば夕陽の雨の後に。虹をなせる姿。又弓を引ける形なり。

シテ
「遙かに臨んで谷を見れば。

地
「足冷ましく肝消え。すゝんで渡る人もなし。神変仏力にあらずは。誰か此橋を渡るべき。向ひは文珠の淨土にて。常に笙歌の花降りて。笙笛琴箜篌。夕日の雲に聞え来。目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや。影向の時節も。今幾程によも過ぎじ。」

(中入)

地

「獅子団乱旋の舞樂のみぎん。く。牡丹の花房に
ほひ満ちく。たいきんりきんの獅子頭。打てや
囃せや。牡丹芳。牡丹芳。黃金の蕊顕はれて。
花に戯れ枝に臥しまろび。実にも上なき獅子王の
勢ひ。靡かぬ草木もなき時なれや。万歳千秋と舞
ひ納め。万歳千秋と舞ひ納めて。獅子の座にこそ
直りけれ。